

秋しゅう 扇せん

大島凜吾

四国・琴平で農家の長女として生まれた私は、封建的で窮屈な暮らしを送りつつも、恵まれた環境の中で育った。そして、二十二歳になった私に、見合い話が持ち上がった。相手はフランス・ブルターニュでの仕事が決まっていた。未熟な私は、その結婚に飛びついてしまった。

まだ五月だというのに、やけに蒸し暑い日だった。

南国高松は、瀬戸の夕風に喩えられるように、夕刻になると瀬戸内海から吹く風が止まり、蒸し風呂のようになる。ただ、それは夏場に感じる現象なのに、今年は衣替えのシーズンを前に、もうその兆候が始めている。周囲に目を向けると、接客をしている者も、受話器を持つている者も、パソコンに向かっていている者も、誰もが額に汗を滲ませ

ている。こう暑いと冷房を入れてほしいが、さすがに五月にそれは言い出せない。私も請求書を作成していたが、化粧を気にしながら時折ハンカチで流れ出る汗を拭った。

それから三十分後、最後の客が帰ると上司が私に言った。

「花森はなもりさん、もうシャッターを下ろしてください」

「はい、わかりました」

正面玄関から一歩外に出ると、まだ日差しは高く、目の前のメインストリートからは車の排気音や人の往来などの喧騒が続いている。ただ、風が止まったとはいえ、社内よりも幾分涼しく感じた。それに微かに潮の香りも漂っている。私は玄関横に置いている海外旅行や国内旅行のパンフレットを店内に仕舞い込み、シャッターを下ろした。だが、それで仕事が終わったわけではなく、それ以降も法人



顧客への請求書を作成しなければならず、デスクへと戻った。

目が回るほど忙しかったゴールデンウィークが終わって一息ついたかったが、そんな暇もなく修学旅行のシーズンに入った。入社後、十五、六年は添乗員として団体旅行に随行していたが、三年ほど前から会社が私の年齢を慮ってくれ、デスクワークを中心とした事務仕事にシフトしてくれるようになった。そろそろ還暦を迎える身なので、その配慮に感謝はしたが、それでも海外旅行や団体旅行から帰ってくる添乗員の苦勞話を聞いていると、どうにも羨ましくなる。

ただ、団体旅行は苦勞も多かった。特に修学旅行では肝を冷やしたことも度々あった。ツッパった中高生が他校の生徒と小競り合いになったり、渋谷や六本木の風俗店に入って補導されたりと散々な目に遭ったが、問題を起こすのは決まって男子生徒だった。

しかし一番腹が立ったのは、韓国に修学旅行に行った際の三人組の女子高生だった。夜の十一時に最終点呼が終わる、私も風呂に入って寛いでいたら、深夜一時過ぎに、女生徒三人がいなくなると大騒ぎになった。まだ携帯電話が普及し始めたばかりの頃で、運悪く三人とも持っていない。すぐに引率していた先生方と私たち添乗員が血眼

になって京城の街を探し回ったが見つからず、もう明け方近くになり、警察に連絡しようかと相談していた矢先に、その三人がひょっこり帰ってきた。聞けば一晩中、明洞の繁華街をほつき歩いていたらしく、担任の先生は口頭で厳しく叱責していたが、怒り心頭の私は、その小娘たちの横っ面を張り上げたくなつたのを必死で我慢した。

よく「旅の恥はかき捨て」と言うが、悪い意味でそれを実践している人があまりにも多すぎる。ただ、それでもあの疲勞感と達成感が混在する感覚は、デスクワークなどではとても味わえない。

この日は、地元中学の修学旅行の帰りを待っていたが、到着予定は午後七時なのに、七時半を過ぎてもまだ連絡がなかった。

(何かトラブルでもあったのだろうか……)

不安に駆られていると、会社の電話ではなく、私の携帯に連絡が入った。まだ経験も浅い女性添乗員からだった。電話口から上気した声が聞こえた。

「あ、沙織さん、今、学校に全員無事到着しました」

「お疲れさん。ちよつと予定時刻をオーバーしとったから心配しとったんよ」

女性添乗員は、最後に事務的な業務報告を済ますと、「今日は直帰します」と言って電話を切った。私も上司にその

旨を伝え、ようやく帰路に就いた。

私がこの旅行代理店に入社したのは、もう三十九歳になる歳だった。夫と離婚し、そろそろ高校生になろうかという一人娘を養っていかねばならず、一年間必死で勉強して旅行業務取扱主任者（現旅行業務取扱管理者）の資格を取得して入社試験に挑んだ。だが、採用条件は三十代までだったし、旅行会社での勤務経験もなければ学歴も高卒だったので、内心では諦めていたが、国家資格と一定の語学力を評価されてなんとか拾ってもらった。

ただ、入社した頃から代理店を通さないネット注文が急速に普及し始め、その煽りを受けて個人客が減り、利益の大きい団体客の奪い合いになった。大手代理店との熾烈な競争の末、価格破壊が始まったが、結果として誰も得をしていなかった。代理店も、バス会社も、ホテルや旅館も、飲食店も、利益度外視で注文を取るため、どこも儲かっておらず、文字通り負のスパイラルだった。忙しい割には儲かってないため当然収入も頭打ちになったが、それでも生活維持するために働き続け、気がつくともう五十九歳という年齢になっていた。専業主婦だった私が、よく二十年も働けたものだと思ながら驚きを禁じえない。来年、六十歳で一旦定年になり、わずかばかりの退職金をもらって、その後、嘱託として五年間勤務できる。しかし手取りは今

の半額程度になる。

よく老後の計画という言葉に耳にするが、実際にこの歳になると「計画」という響きが滑稽に思えたりもする。ただ、不安は不安だ。下がり続ける年金だけでやっていけるだろうか？ 大病を患ったりしないだろうか？ 七十まで働き口はあるだろうか？ 若い頃は頭の片隅にさえもなかった不安が現実として押し寄せてくる。

若いといえば、入社した頃のはかろうじて化粧の乗りもあつたが、ここ数年は忍び寄る老いには勝てず、いくら厚化粧をしてもごまかしはきかなくなつた。それでも無駄な抵抗だと分かっているながらアンチエイジングとかビューティフルスキンという巧みな宣伝文句に惑わされ高額な化粧品を買ったりもしたが、ついぞ枯れ木に花が咲くことはなかつた。そして、やつと歳相応という言葉を受け入れることができるようになったが、それも当然で、幼馴染や同級生でも、もう孫が生まれ、正真正銘のお祖母ちゃんになっている人だつて少くない。

会社を出た後、ハンドルを握りながら夕食をどうしようかと考えた。一人暮らしなので、つい面倒臭くなり、デリバリーやコンビニ弁当で済ませることもあるが、健康面を考えれば、もつと年齢や体調に適した食生活を送らなければならぬ。ただ、もともと食べることは好きで、娘と

暮らしていた頃は、それなりに献立も考え、手の込んだ料理も作っていたが、独りになり、年老いてくると食事を作るのが煩わしくてならない。

(明日は休みだし、久しぶりに家で作るか)

そう思って自宅マンションに程近いスーパーに立ち寄り、食材や日用品の買い物を買ったが、結局テーブルに並んだ料理は手作りとは名ばかりで、惣菜コーナーで売っていたものを単に皿に移し替えたに過ぎない。それでもコンビニ弁当に比べれば少しはマシだった。

食事を終えると、洗濯物が山のように溜まっていたので洗濯機にかけ、その間に風呂に入った。浴槽でぬるま湯に浸かり極楽を味わったが、化粧を洗い落とし、素肌の顔が防湿ミラーに映った途端に、歳相応という現実を受け入れたはずなのに思わずため息をついてしまった。二、三カ月前よりも心なしか老けて見えたからだ。

風呂から上がってパソコンのメールチェックをすると、一件だけ新着メールが入っていた。あの高額な化粧品会社からの新商品の紹介メールだった。

(しつこいな……)

そう思いつつもスクロールしながら見ていると、やけに若々しい中年女性が写っていて、「こんなにも美しい還暦女性」とか「六十歳からでも遅くない」といった殺し文句

が綴られている。一瞬、(買おうか……)という迷いが生じたが、すぐに首を振った。もう騙されないぞと思った私は、「まだ五十九歳よ」と捨て台詞を吐きながらメールを削除した。

その後、冷蔵庫から缶ビールを取り出し、ソファに深く腰を下ろしてキンキンに冷えたビールをくくつと飲んだら、咽喉から食道へとホップの効いた液体が流れ込んでいく。

一番幸せな瞬間だった。誰もいないから遠慮なくゲップも出た。そして、何気なくテレビをつけたが、どれもこれも代わり映えない番組ばかりだった。好感度が高いお笑い芸人が隠れた名店とやらを食べ歩くグルメバラエティとか、いつも同じメンバーが集い、いつも同じメンバーが優勝するクイズ番組とか、信じられないほど演技の下手な女優が凄腕の外科医に扮して決め台詞を連発する珍妙なドラマとか、とても見るに堪えないような番組ばかりで、還暦間際の私でさえ、これならYouTubeの方が断然面白いと思った。もう消そうと思いつつもリモコンをいじくっていると、少し毛色の違う番組をやっていた。有識者とコメントーターがDNA鑑定のことについて語り合っている。この手の番組もあまり見ない私だったが、この日はなぜか見入ってしまった。プライムタイムなので万人向けに垣根を下げた説明してはいるが、それでも識者の口から出る言葉には

難解な専門用語も多い。

端的に言えば、デオキシリボ核酸という遺伝子の核内に存在する物質を調べることで、血縁や品種を見分けるといふ。そんな最先端の科学技術の信憑性を口角泡を飛ばしながら語り合っている様子を見ながら、思わず笑ってしまった。どんなに優れた科学であっても、人の性格や人格までも精査し、見分けることは不可能だろう。そう思って冷笑したが、不意に「それでもないか……」と呟いた。その理由は、一人娘の夏実の存在だった。

もちろんDNA鑑定などするまでもなく、夏実は、私と別れた夫・昌之との間に生まれた子供に間違いない。その証拠に、識者の言う遺伝子とやらは夏実の容姿に如実に表れていて、顔のつくりや体型だけでなく、声までもが私と瓜二つなのだ。親である私の遺伝子が、子である娘に繋がっていることは、普通に考えれば嬉しいはずなのに、なぜか手放しで喜べない。夏実は外見こそ私に酷似しているが、こと内面に於いては、もう一人の存在である夫の遺伝子が悉く支配していたからだ。

そんな娘とは、もう数え切れないほど衝突を繰り返した。とにかく全てに於いて未熟なのだが、その未熟さを本人は全く気付いておらず、裏づけのない妙な行動力がある反面、驚くほど脆くナイーブな一面を併せ持っている。昌之の仕

事の関係でブルーターニュで生まれ育った夏実は、当然フランス語はネイティブだし、高校からは英語に没頭し、大学でも一年間ニュージーランドに留学した甲斐もあり、外国人からも「日本人の割には訛りがない英語だ」と褒められたりもしたそうだ。夏実曰く、外国語は頭で覚えるのではなく、耳で覚えるものだと言い、リーディングよりもリスニングを得意としている。ただ、おっちょこちょいなところもあり、TOEICやTOEFLの試験を受けた後で、自信満々に「パーフェクトよ！」と大見得を切っていたが、二つとも満点はとれなかった。しかし、夏実に足りないのは、フランス語や英語ではなく、日本語と日本文化だった。ただ、それも致し方ない。十四歳までフランスで暮らしていたので、日本という国や文化の礎がないのだ。そして、そういう教育がでなかつた私の責任でもある。

だが、持って生まれた性格は、明らかに私とは違う。何かに没頭した時の集中力は人一倍あるが、そうなると周囲が見えず、余裕がなくなる癖があり、それが原因でトラブルや軋轢を生じてしまう。そんな偏った性格に触れるたびに、別れた夫の顔が見え隠れする。それにもう若くもなく、今年で三十六歳になるが、まだ独身で、親の私ですら今現在どこに居るのかさえも知らない。一応は東京の三鷹にワンルームマンションを借り、そこを自宅兼事務所にしてい

るが、大半はバックパッカー気取りで外国をほっつき歩いている。本人曰く、輸入ビジネスをしてみると言うが、そんな大仰なものではなく、フーテンの寅さんのような的屋の真似事ではない。

結婚後、骨を埋めるつもりで夫婦でフランスに渡ったが、夫の度重なる裏切りや家庭内暴力に耐え切れず、離婚して日本に帰国したとき、夏実は中学二年生だった。ブルターニュの片田舎での教育に不安を感じた私は、日本から教材を取り寄せ、私が教師代わりになって日本式教育を施してきた。その甲斐もあってか、帰国しても落ちこぼれることもなかったし、高校も志望校に合格した。だが、大学に入って私の手から離れると、驚くほど活発になったが、そのベクトルが狂っていた。

三鷹にある大学に入学した夏実は、輸入雑貨を扱う学生ビジネスとやらを学友たちと始めた。海外で仕入れてきた怪しげな雑貨を渋谷や原宿の路上に並べて売るといふ、まさに車寅次郎のような商売だった。最初に少しばかり小銭を稼いだのがいけなかったのだろう、夏実はその似非ビジネスにのめり込んでいった。英語やフランス語がしゃべれるという、ただそれだけを拠り所に、商売のなんたるかなど分からぬまま、仕入れと称して外国を渡り歩いた。

結局、他の学生たちは卒業前には堅い仕事に就いたのに、

夏実だけは大学を卒業した後も女版寅さんが続けている。ただ、拘束されない仕事なので、気が向けばふらっと帰省することもあるが、帰るといつも私と口論になる。そんな胡散臭い商売など辞めてきちんとした会社に就職するか、堅実な仕事をしている人を見つけて早く結婚しろと言っても聞く耳を持たない。

一年前にもひょっこり帰ってきたが、私は腰が抜けそうになった。高松空港まで迎えに行った際に、夏実は帽子を被っていたが、脱ぐと、そこには坊主頭が露わになった。親の鼻根目かもしれないが、夏実は生まれつき癖のない美しい髪だったが、そんな黒髪をぼっそり切り落とし、まるで高校球児のような頭になっていた。そして、その理由が常軌を逸していた。ここ二カ月ほどアフリカのカメルーンやナイジェリア、そしてタイやマレーシアを回っていたそうで、治安の悪い場所も多いから強姦されないために男に成りすましたと何食わぬ顔で言った。サムソナイトの大きな旅行鞆に海外で仕入れてきた怪しげな雑貨を詰め込んでおり、高松で開催されるフリーマーケットに出すという。結局、二週間ほど私と一緒に暮らしたが、連日の私の説教に嫌気が差したのか、最後は不貞腐れて東京に帰ってしまった。

そんな夏実は、時折私を責めることがある。

「あんな幼少期を過ごしたら、まともになんかなれるはずがない」と。

その科白を聞くたびに、私の胸は痛む。どんなに親の立場から娘に人生論や道徳論を説いてみたところで、「あの頃」を持ち出されると、私は弱い……。

私と昌之は見合い結婚だった。でも、それが瓦解の原因ではない。見合いして所帯を持った夫婦でも、大なり小なり争いはあっても根幹部分では互いを尊敬し、支え合って永い人生を歩んでいる夫婦が大半だろう。でも、私と夫には、そんな尊敬や支え合う概念など欠片さえもなかった。

そこに愛人との問題、職場での孤立化、そして私への不満が重なり、家庭内暴力へと繋がった。昌之は生来が小心者で典型的な内弁慶だが、それだけに人や環境と真正面から向き合うことができず、その鬱屈した苛立ちがドメスティック・バイオレンスという卑劣な手段となって私に襲いかかった。そして、その一部始終を幼い夏実は見ていた。

それでも離婚という結論を下すことに私は苦悩した。もちろん娘のためだった。親の勝手で娘に肩身の狭い思いをさせたくなかった。しかし、あの環境のままが娘にとっていいはずがない。悩みに悩みぬいた末の結論だったのに、娘は私を責め、社会に適合できないことを私のせいにする。

もう三十路も半ばを過ぎているにもかかわらず。それに私は、今でも自分が間違っていたとは思わない。娘を愛し、守り抜いてきたという自負心だってある。それをどうしてわかってくれないのか……。

DNA鑑定番組を見ていたからだろうか、それとも缶ビールのせいなのだろうか、私の脳裏に、もうやり直しがきかない「過去」が蘇ってきた。

私は昭和三十八年に香川県琴平町で花森家の長女として生まれた。生家は金毘羅歌舞伎や「森の石松」で有名な金刀比羅宮から二キロほど離れた、代々続く農家だった。父の花森忠志は昭和二年生まれで、太平洋戦争末期に赤紙が届いて兵隊に取られたが、軍隊に入って戦地に赴く直前に終戦を迎えたため、酔うと口癖のように「わしは大東亜戦争で死んどったんや」と聞かされた。幼馴染も数人戦死したらしく、若い頃は毎年のように終戦記念日には上京して靖国神社に参拝していた。

生真面目だが融通が利かない性格で、そんな性格が災いしてか、所帯を持ったのは当時の田舎の青年にしてはかなりの遅い三十二歳だった。終戦直後から町役場に勤務して定年まで勤め上げた。一方、母の静江は隣の町長の娘で、

幼少期は乳母^{おんばひがき}日傘^{ひがさ}で育つたらしく、裕福な令嬢以外には行けなかった女学校を卒業していたが、世情に疎く、浮世離れた思考の持ち主だった。

兄弟姉妹は私の下に妹と弟がいたが、幼い頃の私は、父とまともに会話をした記憶がない。家にいるときの父は、今思うと演技でもしていたのかと疑いたくなるほど不機嫌で仏頂面だった。それを威厳という言葉に置き換えていかどうかは分からぬが、少なくとも子供にとっては畏怖の念を抱かせる存在であつたことは確かだ。

子供の躾や教育は全て母の役目であり、私たち兄弟姉妹は、当時としては、かなり恵まれた環境の中で育つた。貧富の差は今以上に開いていたし、高度経済成長の真つ只中とはいえ、四国の琴平のような田舎までその波は押し寄せてはおらず、旧態な名残^{そこ}が其処^{そこ}彼処^{そこ}に蔓延^{はびこ}っていた。ただ、母がモダンな思考だったからか、惨めな思いとは無縁の幼少期だった。学生服はいつも綺麗にアイロンがかけられていたし、靴や靴下なども汚れが目立つ前に新品と取り替えてくれていた。何より教育にかかる費用は惜し気もなく費やしてくれた。

そんな環境で育つたせいにか、私は成績も良く小学校二年生から中学三年生までは、毎年一学期の級長に選ばれていた。《真面目で模範的な優等生》——中学までの私は、ご近

所からも、クラスメイトからも、先生方からも、常にそんな目で見られていた。だが、所詮は籠の中の鳥であり、両親の庇護のもと飼い慣らされていたにすぎない。

しかし、高校生にもなると、少しずつではあるが自我が芽生え始めた。それは自我というよりも「将来への夢」だった。英語が好きだった私は、漠然とではあるが、将来は英語にコミットする仕事に就きたかった。そのためには大学で語学をしっかり学ぼうと、難関・東京大への入学を目指していた。今ほど大学への進学率は高くない時代ではあつたが、それでも県下屈指の進学校だったため、殆どの生徒が進学希望だった。私も当然そのつもりだったが、三年生になってすぐに父から「大学なんぞ行かんてええ」と言われた。

それは、生まれて初めて経験する挫折だった。クラスにも五、六人の就職希望者はいたが、概ね経済的な理由からだった。だが私の場合は、父のあまりにも古臭い考えからで、大学に進学して屁理屈を覚えるより、固い会社に入っで早く嫁に行けという。そんな前時代的な考えなどとも承服できなかつた。諦めきれない私は、その後も折に触れ父を説得したが、最後まで聞き入れてはもらえなかつた。しかし、だからといって、そんな父を無視してまで受験しようという強い意志はなかつた。ただ、進学への道が途絶

えた私は、父への反発心もあつてか、それ以降はあまり勉強はしなくなった。

そして、高校を卒業した私は、大手製薬会社の高松支店に就職した。今でも覚えているのは、入社時の誓約書に「結婚したら会社を退職する」という一文が添えられており、そこに署名捺印をしなければならなかった。男女雇用機会均等法が浸透している今では考えられないが、当時はそういう時代で、私も両親も何の疑問もなくサインした。それに経理事務として採用されたが、実務は極めて少なく、お茶汲みとコピー取り、それに飲み会の席で上司にビールを注いで回る程度の仕事だった。

それに社会人になったとはいえ、自由が担保されたわけではなく、逆に父は、高校時代以上に異性に厳しくなった。悪い虫がつくのを心配した親心ではあるが、娘からしたら堪ったもんじゃない。休日に遊びに行く際も、どこに行くんだ？ 誰と行くんだ？ 何時に帰るんだ？ と、事細かく追及されたり、もう約束しているにもかかわらず、行かせてもらえなかったことさえあった。

気がつくと、もう社会人になって四年目に入っていた。二十二歳だから年齢的には立派な大人であるはずなのに、悪い意味での箱入り娘だった。

そんなある日、仕事から帰ると両親が待っていたかのようになり、私の前に写真を広げた。瞬間、見合いだと思った。だが、未熟だという現実を自覚していた私は、将来は誰かと結婚するにしても、今ではないという気がしていたが、そんな私の気持ちとは裏腹に母が柔和な顔で言った。

「ねえ沙織ちゃん、ちょっとこの人見て」

私は母が差し出すその写真を嫌々覗いた。写真には昌之が写っていた。整った顔立ちだとは思ったが、特別な感慨はなかった。返事に窮している私に父が言った。

「丹波昌之さんや。お前より五歳年上の二十七歳。どうや、見合ひしてみんか」

どう返答したらいいか迷っていると、父が思いがけないことを言った。

「仕事は、主にヨーロッパやそうや」

「えっ、ヨーロッパ！」

「ああ、なんでも雛の鑑別師をしようとて、安定しとるし、収入もかなり高いそうやぞ」

職業云々よりもヨーロッパという響きにやられてしまった。本当は外大に入学し、将来は語学を生かした仕事があったが、父の鶴の一声でその夢が潰え、就職した後も心の片隅でそんな夢を引き摺っていた。父もそのことを知っていたから、この縁談を私に勧めたのだろう。ただ、

もつと突き詰めれば、父が先方のご両親とも懇意だったことが決め手になつたはずだ。要するに娘の相手は自分が見つけたかつたのだから。その証拠に、父は「どうだ!」とでも言いたげな顔だった。そのしたり顔が癪に障つたが、ヨーロッパで暮らせるのは魅力だった。それに昭和六十年の日本人にとつて、ヨーロッパはまだまだ遠い異国の地だった。舞い上がった私は、この縁談に飛びついてしまつた。

見合いは琴平にある老舗料亭の二階の個室で行われた。

今なら洋装だろうが、私は振袖姿だった。昌之の第一印象は、写真よりもずっといい男だった。瘦身で頭部が小さく、長い睫と焦げ茶色の瞳が印象的で、その下にある細く通つた鼻筋や薄い唇など一見して日本人離れした顔立ちだった。(うわつ、アンソニー・パークンスみたいだ……)

私は目を睜^{みは}つた。端正とか秀麗とは、こんな顔の人を指すのかと思つたが、横に座っている両親は、特にこれといった優美さもなかった。隣の代々続く畜産農家の三人兄弟の末っ子に生まれた昌之は、兄たちとは歳も離れてゐた。二人の兄はかなり優秀らしく、長兄は神戸大学を卒業して香川県庁に勤務し、次兄は九州大学を卒業後、大阪の大手ゼネコンで建築士として働いていた。両親はそんな二

人を自慢げに話していたが、肝心の昌之のことになるとあまり話そうとはしなかった。専門資格を持っているとか、収入が高いとか、少しドイツ語が話せるとか、そんなことを小出しにするだけで、どこか奥歯に物が挟まったような物言いだつた。

それにもつと不可解だつたのは、昌之が父親・謙吉を異様に恐れていたことだつた。私や私の両親と話す際も、隣に座っている謙吉の顔色を窺いながら話している。あまりのフアザコンぶりに驚いたが、考えてみれば謙吉は私の父より五歳も年長の大正生まれなのだから致し方ないとも思つた。謙吉にとつたら、末息子に嫁をあてがうことが老いた親としての最後の役目だとも思つたのだろう、昔から付き合ひのあつた私の父に縁談を持ちかけてきた。それだけに謙吉は私には優しくかつた。昌之には終始仏頂面なのに、私にはむず痒いほど柔和な顔で話しかけてきた。

「花森さんのお嬢さんゆうたら、うちの豚^{とんじ}児には勿体ないのは百も承知しとります」

面と向かつてそう言われると、私は赤面するしかなくかつた。それは私の両親も一緒で、母は慌てて「とんでもございませぬ」と言つて手を振るし、父は父で「いえいえ、うちの娘も相当なお転婆で愚女ですから」と恐縮しながら言つた。

その後も「豚児」と「愚女」の見合いは続いた。そして、少しづつ垣根を下げて互いの仕事のことや家族のことなどを語り合ったりした。

昌之は兄二人と違つて高校を卒業すると大学には進学せず、初生鑑別師しよせいけんべつしの専門学校に入り、資格を取得すると二年ほど日本で働き、その後はヨーロッパに渡つて西ドイツのバイエルンを中心に三年ほど腕を磨いた。そして三カ月後にはフランスのブルターニュで働くことが決まっていた。(ブルターニュか……)

どこか夢心地でいると、母親のミツ子が言った。

「急かすつもりはないんやけど、できれば結婚して二人でフランスに行つてくれたら嬉しいんやけどな」

私はそのつもりどころか、心はもうブルターニュに飛んでいた。それが顔にも態度にも出ていたのだろう、謙吉もミツ子も頗る上機嫌になった。私の両親は、酒は最初に口をつけた程度だったが、謙吉は私が酌をすると嬉しそうにクイクイ飲み始めた。すると、饒舌になった謙吉が妙なことを口走った。

「沙織さんに酌してもらったら酒が旨い。おい昌之、やっぱり嫁さんは日本人に限るぞ」

「え？」——私は謙吉の語尾に違和感を覚えた。

(日本人に限る……どういう意味なのか?)

とても褒められている気がせず、少し首をかしげると、ミツ子が慌ててまくし立てた。

「お見合いの席で酔っ払う親がどこにいますか!」

その一言で謙吉も正気に戻つたのか、薄い頭をかきながら言った。

「あ、いや、やっぱり嫁さんにするには沙織さんみたいな女性に限るつてことです」

そんな謙吉を見る昌之の顔が、ほんの少し歪んだようにも見えた。そして、その歪みの中にこそ「真実」が隠されていたが、その時点では知る由もなかった。そればかりか、憧れのヨーロッパで暮らせることと、この銀幕を彩る役者のような色男の妻になれることに内心では欣喜していた。

だが、《花多ければ実少なし》——私が昌之に幻滅するのに然程時間さほどはかからなかった。最初のデートで私が付き合わされたのは、なんとパチンコだった。

「今日は新台入れ替えの日なんや」

「私、パチンコなんかしたことない」

「そんなもんハンドルを握つとつたらええんじや」

そう言つてパチンコ屋まで行つたが、まだ店は開店しておらず、二十分以上も行列に並ぶ羽目になった。そして店が開くと、並んでいた客たちが脱兎のごとく中へと走り出

し、私は突き飛ばされて転びそうになった。

店内では店員が拡声器で何か叫んでいるが、「いらっしやいませ」以外は何を言っているのか皆目聞き取れなかった。その後、二人並んで打ち始めたが、あつという間に一万円をすってしまった。休日だったせい客は多く、その大半がタバコを吸っており、空気は悪いし音楽もやかましく頭が痛くなった。

「もう出ましようよ」

私がそう言うと、昌之が怪訝そうな顔で言った。

「アホぬかせ、まだ入ったばっかやないか」

その後も打ち続けたが、二人とも負けが込んでいた。私は三万円ほど財布に入れていたが、もう二万円を散財していた。思わずため息をついていると、いきなり「7」の数字が揃った。私が「ねえ、7が揃ったよ」と言うと、昌之が色めき立った。

「あつ、フィーバーや！ 代わったる」

無理やり席を替わると、昌之が言った。

「どっかその辺でコーヒーでも飲んでつてくれ」

それから二時間近くも待つ羽目になった。私はパチンコ屋の周囲を歩いたり、書店で本を読んだりしながら時間を潰した。

そして二時間後、ようやく打ち終わった昌之が満面の笑

みで言った。

「おい、五万円じゃ！ これで元は取り戻せたぞ」

昌之は上機嫌だったが、私の二万円は返してもらえなかった。それでもパチンコ屋から出られることに安堵した。そして、車に乗り込むと昌之が言った。

「よっしゃ、今から映画を観に行こう。俺が奢ったる」

（奢ったる？ 当たり前よ！）と思ったが、口には出さなかった。

お見合い相手と行く映画だから、てっきり恋愛映画だとばかり思っていたが、連れて行かれた映画館で上映していたのはヤクザ映画だった。

「え、この映画を観るの？」

「そやで」

「そやでって……これ、ヤクザ映画じゃない」

「ヤクザ映画やない、任侠映画や」

「どう違うのよ」

「観たらわかる」

「私、いやや。お見合い相手をヤクザ映画に誘うやなんて信じられん」

「ほんだけん、ヤクザ映画やのうて任侠映画や言うてるやないか」

真剣に言っただけに、余計に腹が立った。